
Angel Beats! ~ the quiet world ~

テラタク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n g e l B e a t s ! } t h e q u i e t w o r l d }

【Nコード】

N 7 9 6 0 T

【作者名】

テラタク

【あらすじ】

A n g e l B e a t s ! の主人公、音無結弦がもし女の子だったら・・・という作者の妄想から始まったこの物語。基本的にはA B好きのオリ主が死後の世界で戦線と共にドタドタ、バタバタするお話です。でも一応本編に沿っていきます。不定期更新になります。感想など頂けたらうれしいです。

D e p a r t u r e ! ! 『 覚 醒 の ち . . . 』 (前 書 き)

今回は短めです。

拙い文章ですが、よろしくお願いします(――)

Departure!! 『覚醒のち・・・』

・・・覚醒。

見上げる視界いっぱい広がる、濃い藍色の夜空と輝く星々。

―うわぁ〜きれ〜

最近都会じゃこんなの見れないよ。

やっぱり空気が澄んでるね〜・・・じゃなくて、ここどこ？
私・・・どうしてこんな所に？

まだ、ぼーっとしている頭で考える。

―ていうか私・・・・・・・・・・誰だっけ？

一気に頭が冷えた。

―もしかして私・・・記憶喪失うー？

ココはどこ？ワタシはダレ？っていうあれですか!?

しかも知らない場所に倒れてるってベタベタなパターンだ!!

・・・いや、落ち着け、私。さすがにそんなわけないじゃないか。

きっとこれは夢だ、そう、夢落ちに違いない。

ほら、こうすると・・・

『ムニユ』

・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱ夢落ちじゃなかったあああ

――！！！！

いや、知ってたけどさ、このパターンで夢落ちとかないのは知ってたけどさ！！

どんだけベタだよ！！

心の中で叫び倒すと、不思議と落ち着いた・・・というよりも叫び疲れた。

とりあえず、状況を確認してみることにする。

この空から考えて、時刻は七時から八時くらいだろうか。

私は見覚えのない制服で、コンクリートの冷たい地面の上に仰向けで倒れている。

周りには、まるで校舎のような・・・というか校舎そのものやら、食堂、体育館らしきものまであるのでここは学校と考えてもいいのだろう。

・それにしても、このシチュエーションと光景・・・

「どっかで見た気がするんだけどな」

「目が覚めた？」

「つとおお！！」

不意に足元から投げかけられた声に飛び上がる、私。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない」

足元の声は少し拗ねたような声音で言う。

私は長時間固い所で寝ていたため、痛む背中も無視して起き上がる。

「いや、普通に驚きますよ！！ 大体あなた・・・」

言い終える前に思考停止。

ありえない、そんなわけない。

でも、この白が基調の制服とセミロングの髪をまとめるカチューシャには見覚えがあつて・・・

「ようこそ、死んだ世界戦線へ」

私の目の前でグラウンドに向けてライフルを構えて、そう言つのは・・・

「ゆ、ゆりっぺーーーー！！！」

「え？ どうして私の名前知つてるのよ、あなた？」

―死んだ世界戦線のリーダー、仲村ゆりに違いなかった。

D e p a r t u r e ! ! 『 覚 醒 の ち . . . 』 (後 書 き)

主人公は女の子ですよ（一応確認のため）

さて次回からは日向も参戦し、本格的にコント（おい！！）が始まります。

よろしければ、次もご覧ください。

Departure!! 『天使ちゃんマジ・・・』 (前書き)

早くも暴走気味です。

そしてストーリーがほとんど進んでおりません・・・

Departure!! 『天使ちゃんマジ・・・』

とりあえず分かったことをまとめてみようと思う。

その一、私は死んだらしい。

これが夢ではないのはさっき身をもって確かめた通り。

そしてここはゆりっぺ曰く本物の死後の世界。

死ねないと来れない世界に来たんだから私は死んだというわけ。

自分では全く死んだという実感がなく、どちらかというと『転生』したような感じなのだが。

いや、そもそもこの世界で『転生』というのはおかしいか。

生まれるも何も死んでるわけだし。

『転死』っていうのもなんか転んで死んだみたいだ。

まあ、そんなどうでもいいことは置いておいて、とにかく私は死んでこの世界に来てしまったということ。

その二、私は自分に関する記憶を失くしているようだ。

どれだけ思い出そうとしても生前の記憶はおろか、自分の名前さえも思い出せない。

もちろんどうして私が死んだのかも。

しかしどうやら自分の事以外の記憶はあるらしく、アニメ『Angel Beats!』の記憶は確かにある。

だから『転生』したというイメージが強いのだろうか。

死んで死後の世界に来たというより、死んで二次元世界に『転生』したという方がしっくりくる。

・・・それはそれで複雑な気分だが。

そしてその三、私は本来の『Angel Beats!』では音無結弦のポジションに居るようだ。

アニメ一話の音無の状況と同じだし、ゆりっぺのセリフまでほぼ同じ。

私が音無？ ということでも軽くパニックだ。

「ねえ？ あなた聞してる？」

「え！？ は、はい。 聞いてますよ」

「じゃあ答えて、どうして私の名前を知っているの？」

すっかり忘れていたが、今はゆりっぺが目の前に居るのだった。

さつきからだんまりだった私を明らかに疑いの目で見ている。

こっちは状況整理で忙しかったというのに。

しかし何とか誤魔化さないとまずい。

『転生してこの世界に来ました。だから最後に天使があんな感じになったり、ゆりっぺがこんなことになることも知ってます♪』

・・・なんて絶対に言えない。

信じてもらえないだろうし、なにせあのゆりっぺのことだ。

ばれたら何をされるか・・・考えるだけで恐ろしい。

私は咄嗟に思いついたことを言ってしまった。

「だって顔に書いてありますもん。 私はゆりっぺです、って」

「えっ、ほんとに!!! やっべ今朝落とすの忘れてたわ・・・
ってそんなわけあるか!!!」

―さすが本物、ノリツツコミの切れが違う

感心している私にゆりっぺはため息をつきつつ言う。

「あなた、ほんとに何者なの？ この状況にもあまり驚いている
ようには見えないし、いきなりこの私にネタをふってくるなんて」

「私はただの可愛い17歳の魂ですよ？」

語尾にキラッ が付きそうな感じで言ってみた。

「・・・・・・・・」

ゆりっぺには生ゴミを見るような目で睨まれたが・・・

ていうか私も何をやっているんだろう。

「おい、ゆりっぺ」。 新人勧誘の手筈は・・・ってなんでこ

んな重い空気なんだ？」

原作通りのタイミングで日向が現れる。

うん、やっぱり私は音無役のようだ。

「日向君、ちょうどいいところに来たわ。 目には目を、アホにはアホをと言うし、ちよつとこの子の相手をしてみて」

「俺（私）はアホですか！」「」

見事にシンクロしていた。

—そんな！！ 日向アホとかぶるなんて・・・
私、消えるのか・・・

「ほら、初対面で息ぴったりじゃない。 あなた達もう漫才コンビでも組んで、ガルデモに変わる揺動部隊としてデビューしたら？」

呆れた様子のゆりっぺに日向が答える。

「いきなり話が飛躍し過ぎだが、ほんと、初めて会った気がしないから不思議だ。 何者なんだ？こいつ」

「さあね、私が聞きたいわよ。この状況でも動じないし、私の名前知ってるし、ほんとわけわからないわ」

「おいおい、そんな信用できない奴を勧誘していいのか？ ゆりっぺ」

「まだ、勧誘はしてないけどね。それより・・・」

当事者置いてけぼりで繰り広げられる会話を聞いていた私はそこで唐突に気付いた。

「あああっ！！！！」

「何！？」

「私、この世界で目覚める時はロダンの考える人のポーズで目覚めるって決めてたのに・・・」

一生の不覚・・・」

深い後悔の念に襲われる。

「いやいや、あれけっこう深く腰掛けてますよ。いきなり空椅子して苦悩してるようなポーズで女子高生がこの世界に現れたらビビりますから！？　どんな死に方したらそうなるんですか！！　しかもそれから誰にも声かけられなかったらどうするの？　そのうち絶対足プルプルしてきちゃいますから！！　そこまでしてなんで考える人のポーズ！？　why!？」

「それに一生の不覚つてもうあなた死んでるから！！　その一生が終わってるのよ！！」

「だってゆりっぺさんはクラウチングスタートで、日向さんはマイケルのポウツ！のポーズでこの世界に現れたんですよ。それに勝つにはもう考える人くらいしか無いじゃないですか！！」

「それ一話キャラコメのネタじゃねえか。　ってあれ？俺も何を言ってるんだろう・・・」

「・・・この子勧誘するのほんとにやめようかしら」

「待つてください！！　こんなに有能で可愛くて可憐で美人の私を勧誘しないってどういうことですか！？　あつたまどうなってますか！？」

「どうもなってないわよ。　だいたいあなたを入れるメリットが

見つからないわ」

「そんなことないです！！ 私が『今日のわんこクラブ』に入っ
たあかつきには・・・」

「ちょっと待て、今のもキャラコメネタだろ」

「間違えました。『今日のわんこ戦線』に・・・」

「それもだからな。 しかもなぜ全部椎名の案なんだよ！！
w
hy？」

「日向君、あなたそれ流行らせたいの？ 全然流行ってないわよ」

「ゆりっぺ、お前までキャラコメネタに走るな！！ ああ、誰か
なんとかしてくれよ！！」

日向が叫んだその時だった。

「あなた達、誰か忘れてない？」

「「「あ「「「

・
私達の背後には、いつの間にか長い白銀の髪をなびかせた天使が・

「日向君、ここは引くわよ」

「了解」

そう言い残してゆりっぺと日向は走り去って行く。

「ちよつと!-!」

あとに残されたのは私と・・・天使こと立華奏だけだ。

しかし、ここまで原作のストーリーぶち壊しなのだがいいのだろうか？

「「「・・・・・・・・「「

逃げていく二人を眺める天使の端正な横顔を見て私は、ふと思った。

―天使ちゃんマジ天使！！

「ねえ？」

しばらく自分の世界に浸っていた私は、天使の一言で我に返る。

「はい？ 何でしょう？」

「知ってる？ この世界じゃ心臓を一突きされても死なないのよ」

―あれ？ 天使の顔が少し暗いのは気のせいだろうか・・・

「信じられない？ 証明して欲しいって？」

「いえ、すごーい知ってます！！ 全力で信じてますとも！！」

―天使のオーラがどす黒く染まっているのは・・・

「・・・ガードスキル、ハンドソニック」

「・・・もしかして怒ってます？　ずっと私達のコントの間放置で、出番までスルーされそうになったこと怒ってます？」

「・・・・・・・・」

―天使ちゃん怖い！！　その笑顔が逆に怖い！！

天使はその微笑を浮かべたまま私に一直線に向かって来て・・・

―天使ちゃんマジ悪m・・・

『ズシャッ』

―私の意識はそこで途切れた。

Departure!! 『天使ちゃんマジ・・・』 (後書き)

キャラコメネタ分らない人、ごめんなさい。

そして天使ちゃんファンの方、本当にすいませんでした。

キャラ崩壊・・・もうちょっと自重します。

では、また次回にお会いできることを祈って(切実に!!)

Departure!! 『徘徊』

・・・覚醒。

見上げる視界いつぱいに広がる・・・無機質な白。

「知らない天井・・・」

―って、自分の部屋の天井もわかんないんだけど

どうやらブラック天使に刺されても私の記憶は戻っていないようだった。

「はあゝ」

思わずため息をつきながらも、半身を起こす。

私は下着姿でベッドに寝かされていたようで、わきに私が着てい

たNPCの制服が畳んで置いてある。

もちろん穴開き、血まみれ状態でだが。

ここは原作通り保健室のようで、窓から見える景色も明るかった。

たぶん私を刺した天使がここまで運んで来てくれたのだろうが・

—それなら最初から刺さないでよ・・・

心の中で愚痴をこぼしつつも私は血に濡れた制服へと手早く袖を通す。

正直言っ自分の血で汚れた制服なんて着たくないのだが、贅沢言ってられる状況でもない。

私が音無の設定なら、もうすぐここにはヤツがやって来るはずだ。

血に濡れて気持ち悪い感触の制服を着終え、靴も履いて準備オケー。

—さあ、いつでも来い

私は無駄にファイティングポーズをとりながらヤツが現れるのを待った。

そして

『ガラガラガラ』

「貴様が、ゆりっぺを・・・」

保健室の扉が開き、ハルバートの鈍い輝きが目に入った瞬間、私は叫んだ。

「ああー！！ 校舎裏で日向さんがゆりっぺさんに告白してるううー！！」

「何い！！ 日向貴様ああー！！」

そのまま謎の侵入者（ゆりっぺ心酔なう）は目にも止まらぬ速度で廊下の先へ消えて行った。

ユイが居ないので代わりに私が言わせてもらっ。

「アホですね」

よし、ミッションコンプリート。

これで当面の危機は回避出来た。

後はSSS本部に向かうだけだ。

私は意気揚々と歩き出した。

結論から言おう。

迷った。

どうやら生前の私は相当の方向オンチだったらしい。

NPCに道を聞くこと五回・・・なぜ辿り着けない!?

おまけに血まみれの制服を着て、さっきから同じ所をぐるぐる徘徊してる私は完全に不審者扱いだ。

NPCの生徒に声を掛けようとしても目を逸らされるか、逃げられる。

―ていうか、今までのNPCもよく教えてくれたな

もう私泣くぞ。

最後の希望を求めて私は目の前を通りかかったNPCの制服を着た生徒に声を掛ける。

―神様今度こそお願いします!!

「あの、すいません」

その生徒は学生帽を目深にかぶっていて表情は見えないが、逃げる様子はなかった。

それだけでホッとしている私もどうかと思うが。

「校長室までの道を聞いても・・・いい・・・です・・・」

その生徒が顔を上向けてきて・・・って、え!!

「貴様、神に何の用だ」

「・・・・・・・・」

—いや、神ってあなたのことじゃないですから。

ていうかそのキャラはまだ出ていないはずでは……

私はその場で回れ右をし、駆け出す。

このままでは面倒事になるという確信があった。

故に全力ダッシュで逃げようとしたのだが、すぐさま腕を掴まれてしまう。

「神に声を掛けておいて逃げ出すだと、貴様死にたいようだな。僕の目を見る」

—うわ、ヤバっ！！

焦った私は咄嗟に先ほどと同じ手を使ってしまった。

「お、お前の人生だって本物だったはずだろー！！」

「……貴様何を言っている？ 本当に救いようのない奴だな。だが喜ぶがいい、貴様は一生この僕の奴隷として……」

「ああ、もう!」

私は最終手段を実行。

全力の頭突きを直井にかましてやる。

『ゴオォーン』

割と洒落にならない音が廊下中に響き渡った。

一瞬ブラックアウトした視界が戻った時、目の前には目を回して廊下で伸びている直井（おとなしさああーん!）。

とりあえずそれ（音無さんは僕のy以下略）を踏みつけて勝利を確信する。

もちろん私も頭の中、ぐわんぐわん言ってる状態だが脳にダメージは無い様子。

・・・私は生前相当の石頭でもあったようだ。

そんな別に知りたくもなかった過去を噛み締めつつ、私は歩き出す。

視界はぶれて、どっちが右でどっちが左かも分からないが気にしない。

おそらく血まみれで千鳥足で歩く私を見て、NPCはこう思ったろう。

『あ、ゾンビだ』

Departure!! 『徘徊回』（後書き）

大変遅くなったにもかかわらず、あんまり進んでなくてごめんなさい。

もう三話目なのにまだ一話のAパートすら終わっていません。しかも、もうすぐ期末です・・・

そんな装備（執筆速度）で大丈夫か、俺ええーーーーー!!

Departure!! 『入隊させて下さい』

―奇跡だ。

『校長室』

そう書かれた部屋を前に私は思った。

あれからNPCの生徒達の悲鳴の中を逃げ回り、金属バットや竹刀を持って追いかけてくる筋骨隆々の教師達からも逃げ回り、なぜか目を赤く輝かせながらハンドソニク振り回してくる天使からも逃げ回った。

・・・思い出すだけで泣けてくる。

何で私がこんな目に、と思ったが自分がゾンビ状態だったのを思い出すと何も言えなくなってしまうわけで。

そして右も左もわからぬ状態で学校を彷徨っているうちに今ここにたどり着いた。

この世界に来てから、どこぞの幻想をぶち壊す人のように不幸だあー、と叫びたくなるようなことばかりだったが、ここに来て初めて幸運と言えるようなことが私にも訪れた。

この時ばかりはほんの少し神に感謝した。

一応言っておくが、自称の方ではない。

―さて、ここからどうしよ・・・

このまま入れば、巨大ハンマーに吹っ飛ばされ窓からフライアウエイすることは間違いない。

これ以上痛い思いをするのもいやなので、これは何としても避けたいところだ。

しかしここで知っているはずがないパスワードを言うのも不自然だろうし。

―やっぱりここは生贄召喚しかないかな

と、思っていた矢先、

「さっきはよくも騙してくれたなあ！！ この俺を怒らせるとどうなるか、たつぷり教えてやる」

再び紫ツンツンヘアーの男子生徒が現れた。

—うわー、エサが自ら飛び込んできてくれたよ・・・

「女だろうと容赦はしない。覚悟おー！ー！ー！」

そう言ってハルバートを構え向かってくる野田。

当然私の取った行動は一つ。

大きく息を吸い込むと同時に、

「ああ！！ 校長室の中で二人っきりなのをいいことに、日向さんがゆりっぺさんに暴挙を！！」

「なにい！！ 日向お前殺す！！」

—ていうか、普通にその状況だと、日向がゆりっぺにフルボッコだろ・・・

しかし、野田（役立つアホ）はそんなことにも気付かず、扉に蹴破る勢いで突進して・・・

パカッ

みなさん、準備はオーケーですか？

それではどうぞ、せえーのっ

『いゝつも一人であゝるいゝてゝた』

ヒュウウ——、ドゴオン——！

「ぐはあっ」

パリーーン

何があつたかはわざわざ言わなくても伝わったと思う。

——と、私もこんなアホなことしてる場合じゃなかった。

巨大ハンマーがまたセットされる前にSSS本部に侵入しないと。

私は急いで扉を開け放ち、室内へ突入した。

戦線のメンバー達はみな突然の侵入者に目を丸くしている。

そんな中で、ゆりっぺと日向だけは私の正体に気付いたようですねなりとした顔をした・・・ってこいつら失礼だな。

「あなた、どうしてここに？　ていうかどうやって入ってきたの？」

「そういえばゆりっぺ、さっき野田の悲鳴が聞こえたような・・・」

「じゃあ、あなたまさか！！」

「違いますよ。私はただガードスキル、壁通り抜け　を使っただけです」

「いやいやちょっと待て、この世界じゃ天使しかガードスキルは使えませんから！！　それにそんなガードスキル天使も持つてませんから！！　しかもこれまたまたキャラコメネタですからあ！！」

「まあ、野田君の事はどうでもいいわ」

「相変わらずひどい扱いだな、あいつも報われないぜ」

「それよりもよ、あなた何しに来たの？」

ゆりっぺがあきれた様子で言う。

「なんだよ、こいつ。　ゆりっぺの知り合いか？」

「いいえ、昨日戦線に勧誘しようとしたけれど、寒いギャグを連発する上に日向君とコンビまで組めそうなノリの子だったから、勧誘をあきらめた赤の他人よ」

―そっちなんだ。私がなぜかゆりっぺの名前を知っていた不審者だからとかじゃなくて、そっちの理　　由なんだ・・・

と、思いつつもゆりっぺに反撃してみる。

「そんな！！　私とは遊びだったって言うんですか」

自分で言っつてすごく恥ずかしかった。

私としてはこれで笑いをとって戦線に馴染む作戦のつもりだったのだが、

「・・・・・・・・・・」

一同沈黙。

ゆりっぺの汚物を見るような視線が痛い。

「やだなあ、みなさん。　ジョークですよ、ジョーク・・・」

慌てて誤魔化しにかかるが、時すでに遅くみんなは完全にドン引していた。

「こいつはあ・・・ある意味すげえな」

「僕、なんだかいたたまれない気持ちになってきたよ」

「オゝ、ユゝアゝクレイジーガール!!」

「あなた、ほんとに何しに來たの・・・」

うん、自分でも少し思った。

その後、真剣に説得を続けること10分。

なんとか話を聞いてくれることになった。

「お願いします。私も戦線に入れてください」

「自分から戦線に入れてくれって言う人なんて、なかなか居ないわよ。それにこの死んだ世界戦線は遊びじゃないわ。中途半端な気持ちで入ってもらうと困るの」

―その割には音無とか半ば無理矢理勧誘してたような・・・

「そもそも何で戦線に入りたいなんて思うのよ？ よっぽど死ぬ前に理不尽な思いをしたの？」

「いえ、その・・・生前の記憶は無いんですけど・・・」

「じゃあ、戦線に入る理由なんてないじゃない。これはあなたの為に言うのだけど、理由もなくここに留まり続けるのは止めた方がいいわ。ここは決して天国じゃない。この世界にだって辛い事や苦しいことはたくさんあるわ。それらに耐え続けてまで抗う覚悟がないなら、何も知らずに消えた方が賢い選択よ」

真剣な顔のゆりっぺに言われて初めて気が付いた。

―私、なんで戦線に入ろうとしてるんだろ？ たしかに私は音無の役でこの世界に来てしまったようだけど、私は音無じゃない。別に原作の音無通りに行動する必要はないし、私にも私の人生があったはずで・・・きっとこの世界に来てしまったのは何かの間違いだ。 だったら私は早く成仏するべきなのかもしれない・・・でもなんだろう、この胸のモヤモヤは。 まだやらないけないことがあつたような・・・そんな感じが。 今ここで消えちゃったら後悔するようない・・・

それに生きてた時のことでこれだけは覚えておく。ずっと私は戦線のみんなと遊べたらいいなって思ってた。だから

私はゆりっぺに向けて言った。

「私もなんで自分が戦線に入りたいのか分かりません。 みなさんのように理不尽な人生を与えた神に抗いたいわけでもありません。でも、私がこのまま消えちゃうのは嫌なんです。 何も思い出さずに、ただ前の人生を忘れて、無かったことにして逃げ出すなんて嫌なんです」

ゆりっぺはそんな私を見て、小さくため息を付き、少し表情を崩す。

「ここまで言っても聞かないのなら仕方ないわね。それに人手が不足しているのも事実だし。いいわ。あなたの入隊を認めてあげる。ようこそ、死んだ世界戦線へ」

ゆりっぺは椅子から立ち上がり、私へと手を差し出した。

私はそれをしっかりと握り返す。

「見た所、あんまり運動神経はよさそうじゃないから雑用とかに回ってもらうことになるわよ。」

「……あと囃とか……」

最後の一言がすごく怖い。

思わず頭に天使に突き刺されながらも、ニヤリと笑い腹に巻いたダイナマイトを起爆させている私の絵が浮かんた。

いくらなんでもそれはないと思うが……

「はい、よろしく願います!!」

「おお、なんだかんだで新入りになったじゃねえか。俺は日向、

よろしく頼むぜ」

「すごい！！ 戦線に女の子なんて久しぶりだよ。 僕は大山、よろしくね」

「戦線の実働部隊にはむさい男ばかりだからな。 華やかに
はなるか」

「まあ、そう言わないの藤巻君。 そういえばあなたの名前、まだ聞いてなかったわね」

私の名前・・・まだ思い出せないけど、なんて名乗るかはもう決
めていた。

「私は音無です」

Departure!! 『入隊させて下さい』(後書き)

期末テストも終わったということで更新です。

それにしても普段はネタがそんなに思いつかないのに、勉強してる
とポンポン出てくるのはなんででしょうねww

次回で一話分は終わる予定をしております。

Departure!! 『なぜタイフーンではなくトルネードなのか』

私がSSSに入隊したあの後、まずメンバーを紹介された。

TKや藤巻に続いて紹介されたのは、あの岩沢さん。

あやうくテンションが振り切れて暴走してしまうところだった。

あぶない、あぶない・・・

さつきはゴタゴタで気にする余裕がなかったが、この部屋には岩沢さんが居たのだ。

―もつと早く気付けよ私いい!!

今更だが私はガルデモファンだ。

断言しよう。

紛う方なきガルデモキチである。

カラオケ行っても『crow song』に始まり『一番の宝物

Y u i f i n a l v e r』で終わるのが基本だった気がする。

記憶ないのにこういう事は覚えている私も本当にどうなのだろう・

しかしもちろん岩沢さんにはサインをもらった。

岩沢さんにも変な顔されたし、周りの視線も冷やややかだったがそんなことに遠慮する私ではない。

その上、握手までしてもらった時には昇天しそうになった。

あれ？ 私消えるのか？

続いてクラスSSSの制服をもらい、別室で着替えた。

そして現在・・・

パン！！ パン！！

のどかな学園の風景にあってはならない破裂音が響く。

ゆりっぺは校長室から拳銃（私の知識では何の銃かは分からない）を試し撃ちしていた。

こんな物騒な音がしても平和に部活動やらを続けていられるのは、さすがNPCと言ったところか。

「はい、音無さん。初めてでも撃てるわ」

ゆりっぺが差し出す銃を受け取るが、予想以上の重さに落とすうになってしまう。

「け、結構重いですね」

「当り前よ、本物なんだから。でもあなた本当に非力なようね」

「・・・性格に似合わずな」

パン！！

「何かいいました？日向さん？
でもほんとだ、思ったより簡単に撃てますね」

私は硝煙を上げる銃を日向に向けたまま、笑った。

「何も言ってませーん」

「すごい変わり身の早さだな」

松下五段が日向を見て言う。

「はい、あんた達バカやってないで、オペレーションの説明にくわよ」

ゆりつぺが言うと同時に校長室内の照明が消え、カーテンが全て閉まった。

そしてゆりつぺの背後の巨大スクリーンにSSSのエンブレムが映し出される。

アニメで見た時も3D使ってて臨場感あるなと思っていたけど、生で見るとすごい迫力だ。

というか、無駄な技術だ。

―あれ？　今ギルドの方から殺気が・・・

と、ここでゆりつぺはベレー帽をかぶる。

ずっと思つてただけど、いったい何の意味があるんだろ？

聞いてもいいのか？

「あの、ゆりっぺさん？ 一ついいですか？」

「ベレー帽について以外ならいいわよ」

―あつ、やっぱり触れちゃいけないんだ・・・

「ならいいです。説明続けて下さい」

「じゃ続けるわ。今回のオペレーションは音無さんに慣れてもらうために、いつもやってる簡単なものにするわ。作戦名、オペレーショントルネード」

「こいつはでかいのが来たな」

感心したように松下五段。

―えゝ、リアクションした方がいいのだろうか？

「ト、トルネード・・・」

一応原作通りやっておいた。

「生徒から食券を巻き上げる!!」

「いっそ一万円札とかも巻き上げましょう」

「・・・・・・・・」

ノリで言っただけなのに、またみんなに引かれた。

何回地雷を踏むんだろ、私。

「あなたってお腹の中真っ黒なんじゃないの?」

「ゆりっぺさんほどでは」

しまった、口がつい真実を!!

「んだと、こらあ！？ こちとら清純派ヒロイン目指して毎日頑張ってるんだよ」

「落ち着け、ゆりっぺ。話が逸れてるぞ。それに、んだとこらあとか言うお前に清純派は無理だ」

「そうね、話が逸れて・・・って私に清純派無理ってなんでだよ。私にも清純派キャラやらせろよ。天使みたいに清純派キャラになって、人気出て、『ゆりっぺちゃんマジゆりっぺ』みたいな流行らせてーんだよ！！」

「・・・それは無理だ」

異口同音。

すばらしいチームワークだった。

「お前ら全員、消えてくれ・・・」

「……………完。」

「いやいや、まだ終わらねえから。もうちょっと進みますから今回」

「だそうですよ、ゆりっぺさん」

「ちつ、じゃ続けるぞー。だいたいね、清纯派キャラの定義って何なのよ。私だって……」

「ストップ〜〜〜！！ ストップ、ストップ！！ 続けるのはオペレーション説明の方だ！！」

「しょうがないわね、分かったわよ。音無さん、今回あなたにはバリケード班を……」

「はいっ！！ 私、巨大送風機を回す係りがいいです」

ゆりっぺのセリフを遮る形で私は叫んだ。

「こっちはあなたに天使との戦闘に慣れてもらうために言ってるのだけど」

ゆりっぺの言うことはもっともだ。

しかしこれだけは譲れない。

なぜって？

それは愚問だ。

食堂でガルデモライブがあるからだよ！！！！

生で見れるんですよ、あのガルデモが！！

これはガルデモキチとして見るしかないでしょ。

という説得を数十分続けたが・・・

「いいから、バリケード班やりなさい」

「はい・・・」

私はもう二度と成仏出来そうにない・・・

Departure!! 『なぜタイフーンではなくトルネードなのか』(後書

なんかキャラ崩壊がひどい・・・

文章もひどい・・・

そんな感じです、はい。

あと前回のあとがきに書いてあるのは幻ですよ。

今回で一話分終わらせるとか言っちゃったけど、とりあえずキリまで書いたし投稿しちゃおうなんてことはありませんでした。

めでたし、めでたし(爆)

Departure!! 『麻婆豆腐、欲しけりゃくれてやる!』

第二連絡橋・・・この時間人氣が全く無く、涼しい夜の風だけが吹き抜けていく、そんな場所。

そこに私こと音無と、なぜか日向が居た。

もう一度言おう。

な・ぜ・か、日向も居た・・・why!?

「なんでここに居るんですか、日向さん!?!?! 本編じゃ居なかったのに」

不機嫌顔で聞いてみるが、日向は呆れた顔をするばかり。

「なんでって、それはガルデモキチの誰かさんがさぼらないようにするための監視役を我らがリーダーから仰せつかったからだな」

もう、ゆりっぺに私の行動を見抜かれているだと、

戦線の女リーダーは化け物か！！

「そりあ、いきなりあんだけやらかせばな。つかお前のネタの広さにビックリだよ」

「日向さん、人の心の中に反応しないでください。それにシ〇ア少佐の名言くらい日本人の常識です」

そうだ、今は日向の事などどうでもいい。

ついでにどっかの赤くて三倍で彗星な人のこともどうでもよかった。

今はどうやってここから脱走し、食堂へガルデモライブを聞きに行くかということが重要だ。

ゆりっぺは監視役をつけたことで安心していているようだが、まだまだ甘い。

このガルデモキチの音無（仮）さんがこれしきの障害であきらめると思ったのか。

ハッハッハッ！！ ゆりっぺもまだまだよのう。

それで戦線のリーダーを名乗るとは片腹痛いわ。

「お前が悪役みたいになってるからな」

「だから日向さん、人の心を覗くなって言ってるんでしょ？がっ！」

・・・ん？ おっと、もうこんな時間！！

早く食堂へ行かなければライブが始まってしまっ！！

とにかく脱走作戦実行だ。

まずは初歩的なものから。

「私ちよつとトイレに・・・」

「ダメだ」

即答する日向。

「女の子にトイレ行くな、なんて鬼ですか」

「なんとも言え」

チッ、やはりこの手は通じないか。

ならば作戦2、

「あゝ、日向さん背後に天使が」

「え、ほんと！？って俺が驚いて振り向くとも思ったのかよ。
そんな幼稚な手に・・・」

「居るから日向さんごと撃ち殺します」

「待て待て待て、ちょっと待て！！ なぜ俺ごと撃つ必要がある
？ つか、ライブすら始まってないのに背後に天使居るわけがないが
ない！！！」

「大丈夫です。 後でゆりっぺさんには私から日向さんの最後を
説明しておきます、こんな風に・・・」

『何してる、音無！！ 早く撃て』

『そんな！！ 日向さんごとなんて私・・・撃てません』

『いいから撃て！！ 俺が天使を押さえている間に！！』

『日向さん・・・』

『早く撃つてくれ、頼む』

『う、うわぁー!!』

パン!!

『お前と過ごした日々、最高に楽しかったぜ・・・ガクッ』

『日向さぁーん!!』

「

「脚色し過ぎだぁー!! 俺なんで命捨ててまで天使倒そうとしてんの? この作戦はあくまで時間稼ぎが目的ですから。 どんだけ時間稼ぎに全力なんだよ、俺は。 あとお前と過ごした日々って、まだ一日も過ごしてませんから!! それに、こんだけカッコつけて死んでもどうせ数時間後には復活するんだよ!!」

——♪、♪、♪——

と、その時食堂の方から軽快な8ビートが聞こえてきた。

続いて響いてくるギターとベースの音、そして岩沢さんの歌声。

「しもた!! もうライブ始まってもうてるやん!!」

「なぜに関西弁!？」

「うー、ライブー、ガルデモのライブがー」

本気で凹む私。

これは宝くじで三億円当たったけど、受取期間を過ぎていたくらの悲劇だ。

「あのさ、俺だつてそんなにガルデモ好きなら行かせてやりたいよ。でもこっちはゆりつぺに、もし失敗したら死より恐ろしい罰ゲームって言われてんだ。今回はあきらまれてくれ」

「あきらめられませんよ。私ずっとガルデモ好きだったんですよ。それに岩沢さんのライブが聞けるのはもう・・・」

「なんだよ？」

「・・・・・・・・・・何でもないです」

日向は不思議そうな顔をするが、さすがに岩沢さんがもうすぐ消えてしまうなんて言えるわけがない。

私はなんとなく日向に今の表情を見られるのが嫌で俯いた。

そんな私の頭上に雲に隠れていた月が淡い光を落とす。

そして、

「あつ」

日向の声に顔を上げるとそこに、

天使が居た。

月明かりの陰で表情が見えないのが怖い。

「現れやがった・・・」

「どうするんですか!？」

天使はその長い銀髪を揺らしながらこちらへと歩いてくる。

日向は即座に銃を構え、発砲する。

が、

「ガードスキル、ハンドソニック」

天使に全て弾かれる。

ここも原作とは違うようだ。

「クソッ。音無、食堂前まで下がってそこで迎撃するぞ」

「はい!!」

日向は天使に向け発砲しながら走る。

私もゆりっぺから渡された銃を取り出し、撃ってみるが全くと言っていいほど当たらない。

まあ、当てるつもりもなかったのだが。

そのうち天使も迫って来たので、もう銃はあきらめ全力で走った。

その間にもガルデモの演奏は聞こえてきて、食堂へ近づくにつれその音はだんだんと大きくなっていく。

能天気と言われるかもしれないが私の気分は高揚していた。

だってそうだろう。

大好きなアニメのシーンの中に私は存在しているんだ。
たしかにここで戦ってるんだ。

— find a way ここから

「ファインド、ア、ウェイ、ここから」

流れてくる岩沢さんの声に続けて歌った。

「お前、余裕だな」

「これ一回やってみたかったんで」

私は笑顔で日向に答えた。

そんなことをしているうちに、階段を上り食堂前の広場へ。

私は息を切らせて振り返る。

すると天使もゆっくりと階段を上り近づいて来ていた。

「援軍はまだかよ!!」

苛立たしげに吐き捨てる日向。

でも大丈夫だろう。

きつともうすぐあの紫の筋肉バ力が・・・って、うわっ！！

咄嗟にかがんだ私の頭上数十センチ、つまり先ほどまで私の首があつた場所を長い刃物付きの棒状の物体が風切り音をたてて通り過ぎていった。

回転しながら長い刃物付きの・・・ぶっちゃけハルバートは天使に向かつて飛んでいくが、ハンドソニックによってあっさり防がれる。

「チッ、はずしたか」

それは天使に言ったのか、私に言ったのか・・・

いずれにしろ私は野田への復讐を心に誓った。

ん？ 先に騙したり、生贄にしたのは私？

残念。 私は自分に不都合なことは三歩歩けば忘れるのだ。

「一番弱えとこ狙われたんじゃないか」

「まだ、ハンドソニックだけだよ」

「get a little kiss!!」

その内に戦線みんなが集まってきた。

「後退して過重砲撃」

「ガードスキル、ディストーション」

「撃てえ!!」

そのまま目の前でアニメで見たままの光景が展開された。

天使に触れることなく、軌道を逸らされる無数の弾丸。

人間にあり得ない動きで登場し、天使にクナイを投げる椎名。

その隙にロケランを撃つ松下五段。

しかし無傷で立ち上げる天使。

「クソッ!!」

周囲には様々な火器の轟音とガルデモの演奏が響き渡る。

やがて食券が雪のように広場に舞い落ちた。

私は掌に落ちてきたそれを掴む。

『麻婆豆腐』

・・・え、なんで!?

私の肉うどんはどこへ?

「それでいいのか、行くぞ」

いつの間に銃撃は終わっていて、みんな引き上げているところだった。

「ちょっと待って下さい、せめて麻婆豆腐以外の何かを!!」

慌てて落ちていた食券を拾うがそれも麻婆豆腐。

次々手当たり次第に拾ってみても、全て麻婆豆腐。

「なんで、麻婆豆腐しか落ちてないんですかあゝ!!」

「要らないなら私が貰うわ」

背後に立っていた天使がささやいた。

「っ!!」

「おい!! 早く逃げるぞ!!」

「あの、ちょっとでも……ええええ——!!」

日向に引きずられていく私。

後には、

「麻婆豆腐……」

と呟く、天使だけが残されていた。

ちなみにその後の食堂では、泣きながら麻婆豆腐を食べて火を吐く女子高生が目撃されたそうだ・・・

Departure!! 『麻婆豆腐、欲しけりゃくれてやる!』 (後書き)

またずいぶん期間が空いてしまいました。

待っていてくれた方々、本当に申し訳ありません(――)

しかし、なんとか今回でアニメー話分を終わらせる事が出来たのでホッとしています。

次は番外編になるかと思いますが、よろしければまたお付き合い下さい。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7960t/>

Angel Beats! ~ the quiet world ~

2011年10月8日19時59分発行